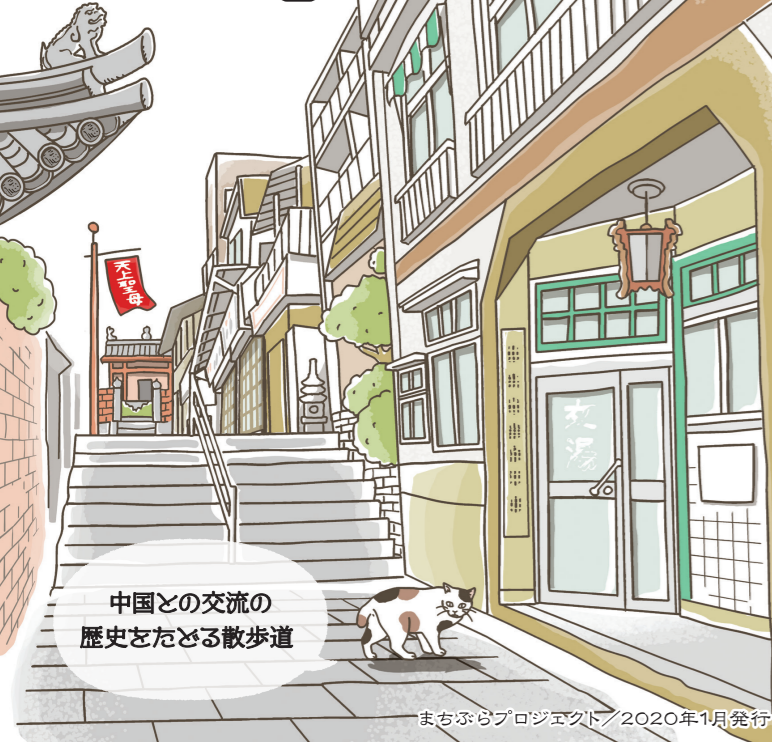


唐人屋敷跡 探訪マップ

Map & History



中国との交流の歴史をたどる散歩道

まちぶらプロジェクト/2020年1月発行

出島と同等の価値を持つ唐人屋敷

唐人屋敷と出島。どちらも日本で唯一長崎に存在する貴重な歴史遺産です。出島は、西欧の文化・学術の交流拠点として、日本の近代化に大きな役割を果たしました。しかし、鎖国時代の長崎や日本に与えた影響は、出島と同様に唐人屋敷も大きく、漢詩文・絵画・書など、唐人屋敷の唐人に学ぶために多くの遊学者が長崎を訪れました。その数は、出島を目指した人々よりも多かったのです。また、中国貿易は、オランダ貿易よりも量・利益ともに上回っており、長崎の景気を大きく左右していました。このように、唐人屋敷は、出島と同等の価値を持っているのです。

唐人屋敷跡に灯りがともる 長崎ランタンフェスティバル



長崎ランタンフェスティバルの唐人屋敷会場

長崎ランタンフェスティバルは、元々長崎の華僑の人たちが、中国の旧正月(春節)を祝うための行事として新地中華街を中心に行っていた祭りです。平成6年から規模を拡大し長崎の冬を彩る一大風物詩となりました。期間中は、メイン会場の湊公園や新地中華街はもとより、浜市・観光通りなどの市内中心部に、約1万5千個にも及ぶランタン(中国提灯)が飾られます。唐人屋敷跡では、「ロウソク祈願四堂巡り」等が行われ、多くの人で賑わいます。

●本パンフレットについてのお問い合わせは、長崎市まちなか事業推進室(☎095-829-1178)

中国との深い交流の歴史を物語る、唐人屋敷跡を歩こう

唐人屋敷跡は、長崎らしい坂道や細い石段、レトロな銭湯跡などがあり、ノスタルジックな気分を味わえます。

1 遺構広場

空堀跡や再現された練堀などが見られます。



観音堂

かんのどう/市指定史跡



アーチ型の石門が印象的

元文2年(1737)に建立されたと推定。現在の建物は、天明7年(1787)に再建したものを大正6年(1917)に改築。本堂には観世音菩薩と閻帝が安置されています。また、基壇には「合端合せ」の技法が見られ、沖繩的な要素もうかがえます。入口のアーチ型の石門は唐人屋敷時代のものと言われています。

福建会館天后堂

ふっけんかいかん てんこうどう/市指定有形文化財



中国との交流史が凝縮!

明治元年(1868)に福建省出身者の手によって現在地に八間(はちびん)会館を創設。明治30年(1897)に建物を全面改築し、福建会館と改称。原爆投下で本館が倒壊し、正門と天后堂が現存しています。中国風と和風が併存した建築様式が特徴で、中国との交流の歴史が凝縮された建造物といえます。大正2年(1913)に孫文が華僑主催の歓迎午餐会に足を運び、県知事らと集合写真を撮った場所でもあります。

概略地図



--- 唐人屋敷跡
— 唐人屋敷時代と同じ通り

6 唐人屋敷象徴門(大門)



館内町入口部に立つ高さ8.7mの中華門。記念写真のおすすめスポット。

7 唐人屋敷象徴門(誘導門)



広馬場商店街入口部にある石造りの門。

天后堂

てんこうどう/市指定史跡

航海安全の女神 天后聖母(媽祖)を祀る

元文元年(1736)に南京地方の人々が航海安全を祈願し、天后聖母を祀ったのが起源。「長崎名勝図絵」によれば、門外左右の旗竿に、天后聖母の字が書かれた紅旗をあげ、風にひるがえていました。閻帝も併祀しており、別名閻帝堂とも呼ばれています。現在の建物は明治39年(1906)に改築されました。

土神堂

どじんどう/市指定史跡

生活を守ってくれる 土神様を祀る

元禄4年(1691)9月、土神の石殿を建立したいという唐船の船頭たちの願いが許され創立。天明4年(1784)の火災で焼失しましたが、唐三か寺により復旧。昭和25年(1950)に老朽解体され、石殿だけが残っていましたが、昭和52年(1977)に復元されました。

2 唐人屋敷時代の堀跡

唐人屋敷の周りを囲んだ堀の跡。現在も水路として利用されています。

3 森伊橋

明治時代に堀に架けられた地元出身の森伊三次氏寄贈の石橋。栄橋・森橋も森伊三次氏が寄贈。

森伊三次ってどんな人?

開国後、長崎奉行が退去し、唐人屋敷地区は管理者不在の状態となります。そこで、唐人屋敷跡の掘下げを受け大地主となったのが森伊三次です。地元の名士でもあった森伊三次は、地区の再整備に努め、館内町の河川に石橋を架け、今も3橋が現存しています。ちなみに、ブリックホールなどが建つ茂里町は、森伊三次が新田開発を行ってきた町で、町名は「森」に由来しています。

4 蔵の資料館(旧森家の蔵)

明治26年に建てられた旧森家の道具蔵を曳家移転・改修して開館。唐人屋敷の歴史、唐貿易、唐人の生活や催事などのパネル、発掘調査で出土した当時の陶器類などを展示しています。

【開館時間】9時~17時
年中無休、入場無料

5 十善寺地区まちづくり情報センター

十善寺地区のまちづくりの拠点。蔵の資料館に隣接し、唐人屋敷に関する情報発信や情報収集、交流の場になっています。

【開館時間】10時~16時
土日祝祭日は休館日
【問合せ】
Tel.095-829-0267

唐人屋敷跡でできる 中国文化体験

中国茶体験

さまざまな種類がある中国茶。まずは代表的な烏龍茶の淹れ方を体験を通してマスターして、五感で楽しむ中国茶の奥深い世界をのぞいてみませんか?(チャイナ服無料貸し出し有) ※その他の種類のお茶も体験できます。お気軽にお問い合わせ下さい。

料金:1名2000円 時間:60分 (1名より受付可・2日前までに要予約)

太極拳体験

太極拳の基本を体験し、カンフー体操を覚えます。意識して身体をコントロールすることで、心と体のバランスを整えましょう。

料金:1名1500円 定員:5~40名 (30日前までに要予約)

二胡体験

中国の楽器「胡弓(こきゅう)」でキラキラ星の演奏を体験できます。チャイナ服を着て体験できるのも魅力のひとつです。

料金:1名1500円 定員:5~15名 (30日前までに要予約)

【ご予約・お問合せ】
十善寺地区まちづくり情報センター Tel./Fax.095-829-0267
受付場所:十善寺地区まちづくり情報センター (map 5)



館内のミーちゃん

海外交流の窓口として大きな役割を果たした唐人屋敷

唐船の来航増加

長崎への唐船の最初の来航は永禄5年(1562)という伝承があります。元亀2年(1571)にポルトガル船が入港し、長崎の町建てが始まると、やがて唐船も多く来航するようになりました。江戸時代に入ると、ポルトガル貿易とともに中国貿易が盛んに行われるようになり、寛永11年(1635)には、唐船の入港が長崎に限定されました。鎖国時代の長崎では、ポルトガルに代わったオランダ貿易が開始され、両者を比べると、中国貿易の収益がおよそ2倍もあったので、長崎の景気は、唐船が何隻来航したかどうかに大きく左右されていました。また、貿易を円滑に行うために、貿易現場での通訳や外交文書の翻訳などを行う「唐通事(とうつうじ)」と呼ばれる人たちが活躍しました。なお、長崎では中国を唐、中国人を唐人といいます。



石崎融思「唐船入津丸荷役之図」/長崎歴史文化博物館蔵

◆中国からの輸入品◆

生糸、反物、薬種(人参、甘草など)、香木(伽羅、白檀など)、砂糖、鉱物(鉛、水銀など)、染料、皮革、唐紙、唐墨、筆、書籍、山水画、焼き物など

◆日本からの輸出品◆

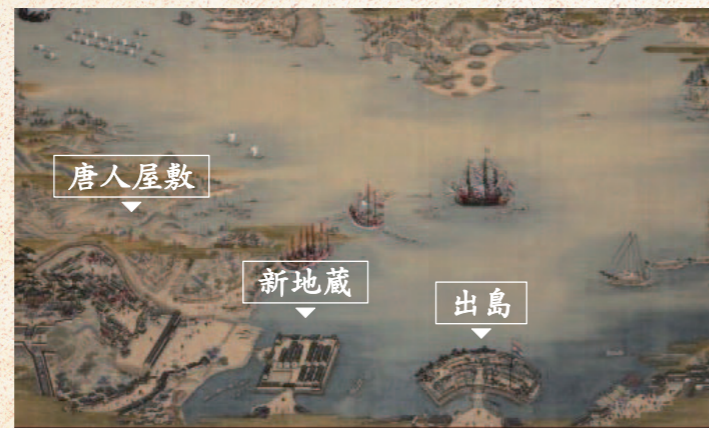
銅、銅器、俵物(干アワビ、干ナマコ、フカヒレの三品のこと)、昆布、すめ、かつお節、シイタケなど(18世紀中ごろまでは銀も輸出)

「唐人屋敷」の誕生

貿易で長崎に来航した中国人たちは、最初は長崎市中の馴染みの家に泊まっていたが、唐船来航の急増に対応し、中国貿易を管理するため、元禄2年(1689)に中国人たちが滞在できる唐人屋敷を現在の館内町に完成させました。唐人屋敷の広さは約9,400坪で、周囲を練堀で囲み、その外側に水堀あるいは空堀を、さらに外周には一定の空地を確保し、竹垣で囲いました。

中国より来航した荷物は新地蔵へ、商人や船員は唐人屋敷へ

元禄11年(1698)に長崎市中で起きた火災は、樺島町や五島町の土蔵に収納していた唐船20隻分の貨物を焼失させました。そこで元禄15年(1702)に土蔵所有の町人39人によって海を埋め立てて「新地蔵」(現在の新地中華街)が造られ、以後、唐船の荷物を収納するようになりました。新地蔵は土堀で囲まれ、南側に水門が4つあり、ここから荷物が運び込まれ、積み出されました。



円山応挙「長崎港之図」/長崎歴史文化博物館蔵 ※江戸後期の長崎港

中国の商人や船員たちは厳重なチェックを受けた後、手回り品のみで唐人屋敷に入り、中国へ帰る日まで唐人屋敷に滞在しました。唐人屋敷の入口には門が2つあり、外側の大門の脇には番所が設けられ、無用の出入りをチェック。とりわけ二ノ門は役人であってもむやみに入ることは許されませんでした。内部には、2階建ての長屋が約20棟建ち並び、一度に2,000人前後が滞在できました。滞在中、奉行所の許可を得て、唐寺参詣や航海安全の祈願のために金毘羅山登山へ出かけることもありました。その回数は結構多かったのです。

「唐人屋敷」に日本人は入れたの?

日本人が唐人屋敷に出入りする時は、門鑑(通行許可証)が必要でした。写真の門鑑は、天保10年(1839)に唐人屋敷乙名が発行したものです。唐人屋敷の大門と二ノ門の間には広場があり、宝永5年(1707)以降、魚や野菜などの日用品の他、漆器や伊万里焼などを並べたお店が設けられました。この門鑑は、ここでの商売を許可された商人たちに発行されました。ほかにも普請(工事)等での出入りする職人や二ノ門の先まで入ることができた遊女にも発行されました。



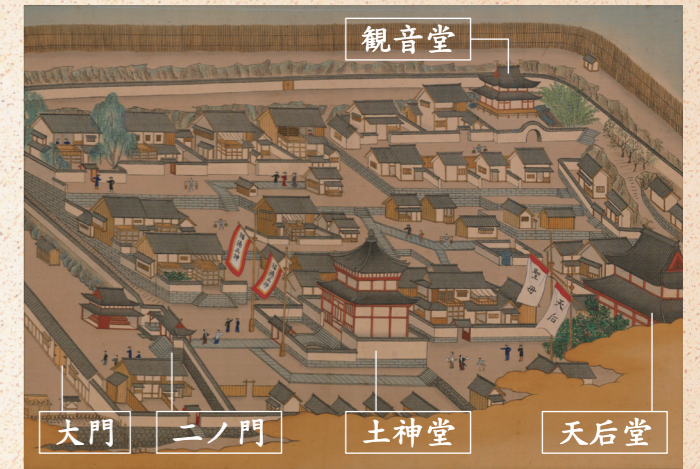
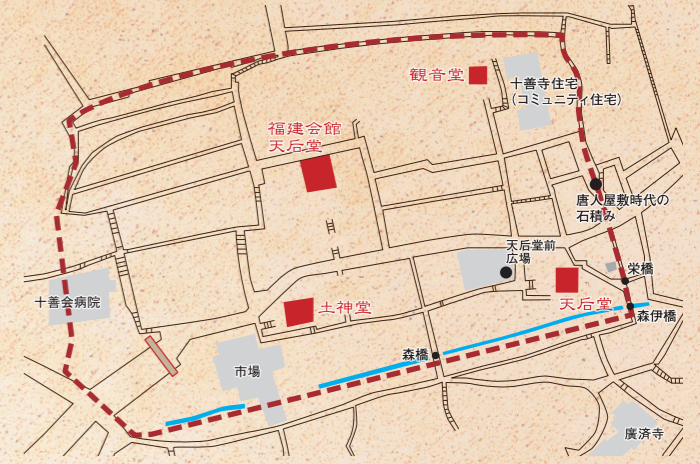
門鑑(鑑札)天保10年(1839)/長崎歴史文化博物館蔵

「唐人屋敷」はいつなくなったの?

唐人屋敷完成から100年以上がすぎた天明4年(1784)、唐人屋敷は大火災により一部を残して全焼しました。この大火災以後、中国人が自分たちで建築することを許されるようになり、中国人街のような独特の景観に変わったようです。安政6年(1859)の開国後は、だんだん唐人屋敷は廃屋化し、中国人の多くは新地や大浦の外国人居留地に住むようになりました。

明治3年(1871)唐人屋敷跡で再び大火災があり、建物等の大半を焼失してしまいました。現在、唐人屋敷跡に残るお堂は、その後改修や復元されたものですが、当時の石積みなどは遺っています。

唐人屋敷があったエリア ※お堂の位置で比べてみましょう



「唐人屋敷の図」/長崎歴史文化博物館蔵

長崎にとけこんだ中国文化は唐人屋敷から伝わった



石崎融思「唐館図 唐館図蘭館図絵巻」/長崎歴史文化博物館蔵

唐人屋敷には滞在するための長屋が20棟近くあり、すべて2階建てでした。造りも立派で眺めの良い2階の部屋には船主や会計係など身分の高い人が住み、1階は大部屋で船員が滞在していました。写真上部の行列は、長崎ランタンフェスティバルで再現されている媽祖行列の風景で、この通りは本パンフレットの表紙にもなっている土神堂から天后堂へ続く300年の歴史の道です。

300年の歴史の道ねえ、歩こうよ



川原慶賀「唐蘭館絵巻」より「龍踊図」/長崎歴史文化博物館蔵

唐人屋敷で上元(正月15日)に行われていた祈福の祭り。この龍踊りを唐人屋敷に隣接する籠町の町民が習い、現在、長崎くんちの奉納踊「龍踊り」として伝えられています。

なるほど!これが龍踊りの原形だったんだ



川原慶賀「唐蘭館絵巻」より「彩舟流し」/長崎歴史文化博物館蔵

中国の「彩舟(さいしゅう)流し」は、お供え物で飾った唐船の模型を燃やし、亡くなった人々を供養した行事。彩舟流しは明治以降に廃止されましたが、長崎でお盆の8月15日に行われる精霊流しは、この彩舟流しが原形といわれています。

うわあ!船が燃えてるよ!



作者不詳「唐館図」/長崎歴史文化博物館蔵

大門と二ノ門の間の広場では中国人たちが、長崎市中の商人から日々の食材や燃料の薪などを購入しました。ニワトリ・アヒル、魚類、大根も売られていました。銅器の販売・購入は貿易そのものです。ここは中国人と長崎人の交流の場だったのです。

今日の献立は何だろう?



川原慶賀「唐蘭館絵巻」より「唐人部屋遊女遊興図」/長崎歴史文化博物館蔵

唐人屋敷への日本人の出入りは厳重に監視されていました。でも、日本人であっても出入りを許されていたのが遊女たち。遊女の三味線と唐人の胡弓の合奏も見られました。また、食卓を囲んで食事をする習慣(ちやぶ台の原形)やお茶を楽しむ習慣をはじめ、長崎の郷土料理になっている卓袱料理も中国文化の影響を受けて誕生しました。

えっ!?ちやぶ台って元は日本の文化じゃなかったんだ



川原慶賀「唐蘭館絵巻」より「観劇図」/長崎歴史文化博物館蔵

土地神の誕生祭で行われていた唐人踊。月琴や笛、銅鑼(どら)、喇叭(らっぱ)などの楽器の演奏に合わせて演技していました。また、中国から伝わった音楽「明清楽(みんしんがく)」は、今も長崎の伝統として受け継がれています。

この演目は何かな?



お堂に祀られた神様

土神(土神堂)

福德正神ともいわれ、土地や家を守り、豊作、金運、治病の神様として信仰されています。長崎のお墓で多く見られる「土神」と書かれた小さな石碑は、中国の土神信仰が長崎の風習に根付いたものです。



土神堂の土神



天后堂の媽祖

媽祖(天后堂、福建会館天后堂)

長崎ランタンフェスティバルの媽祖行列でおなじみの海の女神様。中国から船で渡って来る中国人たちの航海の安全を守るため船内に祀られ、長崎に着くと唐寺にお祀りし、唐人屋敷内にもお運びしていました。



天后堂の関帝

関帝(天后堂、観音堂)

三国志で有名な武将、関羽雲長が神格化されたもので、古来より守護神として祀られました。また理財に精通しロパンを開発したと言われることから商売繁盛の神として信仰を集めています。



観音堂の観世音菩薩

観世音菩薩(観音堂)

仏教の代表的な菩薩で、観音さまとも略称されています。安らかな表情をされ、慈悲深い仏として、中国や日本でも人気があります。

